

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究(B)（一般）
 研究期間：2018～2020
 課題番号：18H00658
 研究課題名（和文）口語版漢訳聖書の黎明期における文体 文法特徴と翻訳過程の解明に基づく比較研究

 研究課題名（英文）The literary style of early Bibles in vernacular Chinese varieties: A comparative study examining grammatical features and the translation process

 研究代表者
 吉川 雅之（Yoshikawa, Masayuki）

 東京大学・大学院総合文化研究科・教授

 研究者番号：30313159
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では口語版の漢訳聖書の文体がどの様に構築されたかを、文法特徴と翻訳過程の両面から問い、その統合的解釈を行った。基礎資料はその事実上の黎明期である19世紀中葉に刊行された福音書である。まず、章句の統語構造および特徴的語形に着目して、同一言語の異版に対する縦断的比較と、異言語の版に対する横断的比較を行った。次に、口語版漢訳聖書に反映する音声言語の特徴を明らかにした。そして、各版の差異と相互関係を分析し、漢訳の作業過程についての仮説を立てた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は口語版漢訳聖書に反映する音声言語の特徴を明らかにしただけではない。口語版漢訳聖書を含む明清朝期の欧文資料（欧文では記されていないが欧文が当該文献の成立背景に在る準欧文資料も含む）がどのような学術価値を有し、その研究方法はどうあるべきかという、資料論と方法論を問い直す新たな視野も示した。文字資料に反映した音声言語の実像をどの様に問うかは、従来漢文資料については議論がなされてきたが、欧文資料については十分な議論が行われてこなかった。欧文資料は漢文資料とは些か異なる特性を有するため、そこには可能性と問題点が存在する。本研究ではそれとどの様に向かい合うかという学理まで論じることができた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigated how the literary style of the colloquial Chinese version of the Bible was composed based on its grammatical features and the translation process, based on which built an integrated hypothesis about its translation procedure. The basic material in this study is editions of the Gospels published in the middle of the nineteenth century. In this study, focusing on the syntactic structures and characteristic word forms appearing in passages, we first compared different editions in the same language/dialect of Chinese diachronically, and contemporary editions of the Chinese version in different languages/dialects cross-sectionally. Next, we clarified the characteristics of the colloquial language reflected in the Chinese translation of the Bible. Finally, we analyzed the differences and interrelationships between the editions and posited hypotheses about the working procedure of the translation into Chinese.

研究分野：中国語学

キーワード：文献学 刊本 キリスト教 翻訳 近代漢語 欧文資料 南京官話 北京官話

1. 研究開始当初の背景

欧文資料を基礎資料とする研究は、1990年代以来中国語学に於けるフロンティアの一つとして成長してきただけでなく、近年では文学や文献学でもフロンティアを形成しつつある。明清期及び中華民国期の漢語派の音声言語(地理的変種を含む)を扱う研究は、欧文資料の価値が学界で認知されるようになったことに伴い、過去四半世紀間に急速な変質と発展を遂げた。欧文資料は漢文文献に無い利点を有している。文献に反映した言語形式(特に音価)・言語種・時期が説得力を伴って特定できることは、その最たるものである。

漢訳聖書はラテン文字(欧文)で記されたもの、漢字で記されたもの、新造文字で記されたものに分れるが、漢字や新造文字で記されたものであっても、ラテン文字で記されたものと同様に、漢語派の音声言語の諸相を明らかにする一次資料として活用することができる。これらは21世紀の現在に於いては、同時代資料ではなく歴史資料として活用される。それによる研究は斯界に新しい可能性と枠組みをもたらしつつあり、明らかに近代口語の解明に於いて独自の世界を築きつつある。

2. 研究の目的

19世紀は中国にとってキリスト教(プロテスタント派)との邂逅の世紀であった。キリスト教を介して流入した諸々の西洋文明が近代中国に多大なる影響を与えたことは、周知の事実である。言語や文字、文学も決してその例外ではない。漢語に翻訳された聖書や教理問答は、その内容が思想・宗教面で華人に影響を与えたのみならず、その翻訳文体が書記言語としての漢語に影響を与えた。19世紀中期になると、それ以前の文言版聖書に加えて、官話をはじめとする音声言語を反映する聖書が刊行され始める。これは、画期的な出来事であった。それまで音声言語としてのみ存在した漢語派諸言語が文以上の大きな単位で文字化され、更には書記言語化に至る契機となったからである。確かに、漢語派諸言語の幾つか(例えば粵語(即ち広東語))はそれ以前に「方言文学」と称されるものを有してはいた。だが、その殆どは句以上の大きな言語単位で音声言語を反映するものではなかった。故に、この時期を黎明期とする口語版漢訳聖書は、これら諸言語の特徴を解明する上で、事実上最古で且つ最大規模の資料であると考えてよい。本研究の問いは、これら「音声言語で記された」長文がどの様に構築されたかに在る。

3. 研究の方法

本研究では先ず、同一言語の異版に対する縦断的比較と、異言語の版に対する横断的比較を、統語構造および特徴的語形に着目して行い、各版の差異と相互関係を解明する。続いて、翻訳過程を示す史料の記述と照合することで、その漢訳の作業過程について仮説を提示する。そして、漢訳文体の標準化という問題について考察を行う。言語学と歴史学の研究者による共同作業によって文体と翻訳を解き明かす、学際的な方法を用いる。

4. 研究成果

研究期間全体を通して、基礎資料たる文献の収集と章句のデータベース化を進め、同一言語の異版や異言語の版の間で見られる章句の異同を分析し、その原因について考察を行った。

(1) 2018年度

吉川は日本中国語学会第68回全国大会にてワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」を組織し、国内の研究者2名、海外の研究者1名と共に口頭発表を行った。ここで言う「域外資料」とは欧州人が関与した明清・中華民国期の文献を指し、漢訳聖書(たとえ漢字で表記された版であっても)も含まれる。これらが文献資料であることに変わり無く、文献に記された文字情報に基づいてどの様に音声言語の実像を問うかという、資料論と方法論まで踏み込んだ発表を行った。

また、ライデン大学図書館に所蔵される、1850年に著された中露字典の抄本に対する分析も行い、論文「ある中露字典の漢字音について」に纏めて発表した。この抄本の漢字音には中国北部に分布する諸方言に典型的な特徴が顕著に現れており、且つウェイドの『尋津録』(1859年刊)に記された漢字音と重要な特徴を共有する。本論文では、その基礎方言が当時の北京方言に近い方言種であったことを論証した。19世紀中期は音声言語のヒエラルキーが新旧交代を遂げつつあった時期である。北京官話と称される言語が、広域通用語「官話」に取って代わり、頂点に君臨しつつあったと考えられている。1860年代には北京官話訳と称する口語版漢訳聖書が現れ始める。この抄本の漢字音は、北京官話と称される言語が当時どの程度の威信と影響力を有していたかを推定する上で重要な情報を提供するものである。

(2) 2019年度

欧文資料に基づく近代口語研究を論じた論文数点が、国内の学会誌『中国語学』266号で巻頭特集記事として掲載された。これは、上記のワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」で行った口頭発表の内容を発展させ、中国語で執筆したものである。また、吉川は東洋文庫・極東学院が主催した国際ワークショップで口頭発表を行い、音声言語

が学術の対象として形作られてきた軌跡を、19世紀の辞典・語彙集を基礎資料として辿った。これは、欧文資料を用いて行う研究の意義が、決して言語体系内の事柄の解明に終始するわけではなく、言語体系外の事柄の解明にも独特の力を発揮することを論じたものである。このワークショップの成果は論文集として刊行されることが決定しており、現在編集作業が進められている。

盧は、日本中国語学会第69回全国大会で「《約翰傳福音書》(南京)官話版與(北京)官話版之基礎方言探究」と題した口頭発表を行った。これは「ヨハネによる福音書」について北京官話訳と南京官話訳の諸版を比較した論考である。「北京」、「南京」という19世紀以来の固定観念を覆す可能性を秘める点で、本研究の一大成果である。

倉田は、ミラ・ゾンターク編『グローバル・ヒストリー 中のキリスト教』の一章を執筆した。

(3) 2020年度

吉川は韓国の慶星大学校韓国漢字研究所が開催した「第三屆漢字學國際冬令營」(第3回漢字学国際セミナー)で登壇し、「近現代に於ける字体新造について」という題目で講演を行った。その第5節で、漢訳聖書をはじめとする19世紀後半の文献に現れる字体について、欧文との関係に注目して論じた。これは19世紀中後期の漢訳聖書の分析を進める過程で発見した、興味深い現象について述べたものである。

倉田は、中国で長期間布教活動に従事したティモシー・リチャードの回想録を翻訳した『中国伝道四五年』を著した。

以上の他に、研究期間終了の2021年3月末日時点で、論文2篇を学術誌に投稿中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 近現代に於ける字体新造について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第三屆 漢字學國際冬令營 講稿	6. 最初と最後の頁 167-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉田 明子	4. 巻 636
2. 論文標題 香港社会とキリスト教：中国との関係性から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東亜	6. 最初と最後の頁 70-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 266
2. 論文標題 西文資料與近代口語研究 回顧與前瞻	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7131/chuugokugogaku.2019.266_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 266
2. 論文標題 西文資料與粵語研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 11-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7131/chuugokugogaku.2019.266_11	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柯理思 (Christine Lamarre)	4. 巻 266
2. 論文標題 西文資料與客家話研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語学	6. 最初と最後の頁 30-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7131/chuugokugogaku.2019.266_30	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 盧 建	4. 巻 -
2. 論文標題 《約翰傳福音書》(南京)官話版與(北京)官話版之基礎方言探究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本中国語学会第69回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 219-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉田 明子	4. 巻 22
2. 論文標題 近代中国「間島」地域のキリスト教	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quadrante クアドランテ	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題 趣旨説明	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国語学会第68回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 21-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題 研究史概観	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国語学会第68回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 22-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 -
2. 論文標題 域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題 域外資料による粵語研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国語学会第68回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 23-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 クリスティーヌ・ラマール	4. 巻 -
2. 論文標題 域外資料による客家語研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本中国語学会第68回全国大会予稿集	6. 最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉川 雅之	4. 巻 174
2. 論文標題 ある中露字典の漢字音について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 166(39)-126(79)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00077043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 吉川 雅之
2. 発表標題 近現代に於ける字体新造について
3. 学会等名 第三屆 漢字學國際冬令營（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉川 雅之
2. 発表標題 英粵辞典・語彙集の歴史 文献学から見た19世紀標準広東語の構築
3. 学会等名 東洋文庫・極東学院国際ワークショップ「外語の熟達から世界の統制へ 近世の東アジアにおける対訳辞書と語彙集を考える」（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 盧 建
2. 発表標題 《約翰傳福音書》（南京）官話版與（北京）官話版之基礎方言探究
3. 学会等名 日本中国語学会第69回全国大会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 倉田 明子
2. 発表標題 李提摩太與普世基督教：以他對佛教的理解與普世教會合一運動的關係為中心
3. 学会等名 第十一屆近代中國基督教歷史研討會 「華人教會與普世基督教」（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉川雅之
2. 発表標題 研究史概観
3. 学会等名 日本中国語学会第68回全国大会 ワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉川雅之
2. 発表標題 域外資料による粵語研究
3. 学会等名 日本中国語学会第68回全国大会 ワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 クリスティーン・ラマール
2. 発表標題 域外資料による客家語研究
3. 学会等名 日本中国語学会第68回全国大会 ワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 渡辺祐子監修, 石川照子, 桐藤薫, 倉田明子, 松谷曄介, 渡辺祐子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 かんよう出版	5. 総ページ数 254
3. 書名 増補改訂版 はじめての中国キリスト教史	

1. 著者名 蒲豊彦, 倉田明子監修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 456
3. 書名 中国伝道四五年: ティモシー・リチャード回想録 (東洋文庫903)	

1. 著者名 ゾンターク ミラ, 倉田 明子, 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 290
3. 書名 グローバル・ヒストリー の中のキリスト教: 近代アジアの出版メディアとネットワーク形成	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>吉川雅之: 研究助成と学術イベント「口語版漢訳聖書の黎明期における文体」 http://www.ac.cyberhome.ne.jp/~hongkong-macao/grant-in-aid_2018-2020.html</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	倉田 明子 (Kurata Akiko) (20636211)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授 (12603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	盧 建 (Lu Jian) (80540872)	名古屋大学・教養教育院・その他 (13901)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ラマルル クリスティーン (Lamarre Christine)	フランス国立東洋言語文化学院・Departement Chine・教授	
研究協力者	張 ゆえ (Zhang Yue)	東京大学・大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻・博士課程	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
日本中国語学会第68回全国大会 ワークショップ「域外資料から近代口語を問う 文献言語学の挑戦と課題」	2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関